



〈中〉

# 働き方の違いに戸惑い

ているスタッフもいた。「休むときはしっかり休む」。そんな考えだと理解した。

中山莉聡さん(20)は英語を第二言語とする国で働く際のコミュニケーションについて考えさせられた。職場で行き交うのはベトナム語。「英語が通じてても、現地言葉も知っていない」と

8日夕、ベトナム・ダナン市人民委員会のビル25階にある外務局のオフィス。県立大国際経営学科2年生の3人はアジア太平洋経済協力会議(APEC)参加者に配る資料などの袋詰め作業に追われていた。

11日間のインターンシップ(就業体験)中、華やかな国際会議の場とは裏腹に、語学力をあまり必要としない「雑用」も少なくなかった。石本信太郎さん(20)は「泥くさくやるのは当たり前」と話す。国民性や働き方の違いに戸惑うこともあった。例えば昼休みは2時間。ベトナムは昼寝の習慣があり、ソファで寝

溝田卓真さん(20)は「現地にいかに対応してビジネスをしていくかという質問。大学で学んでいることが仕事に直結している」と感じた。その上で「海外に進出した日本企業はどのようになっているのか」と関心が湧いた。

2016年度の学部学科改編で誕生した国際経営学科は、3年次の海外ビジネス研修(通称ビジ研)を必修化しているのが特徴だ。

## 海外ビジネス研修



APEC参加者に配る資料について外務局のスタッフに確認する石本さん(右)と溝田さん(左)＝ベトナム・ダナン市人民委員会

14年度から既存学部で試行してきたが、来年夏に本格的に始まる。

大学はこれまで教職員らが現地に進出した日本企業などを回り、研修先を開拓。14年度からの4年間でシンガポール、タイ、ベトナム3カ国で延べ50企業・団体が計62人の学生を受け入れた。岩重聡美学科長は「枠

組み自体はある程度できている」とする。一方で「研修の質的向上を図らないといけない」と課題を口にする。「ビジ研」は国際舞台での実践力を身に付けることや進路の開拓が狙い。自主性を養うため、学生は研修先と直接やりとりをしてプログラムを作り上げる。岩重学科長は「学

生はまだまだ受け身」とさらなる成長を期待する。ビザの取得など準備期間を考えると来春には研修先を決めなければならない。ダナンでの研修を終えた溝田さんはこう話した。「(来春までは)自分がどの分野に進みたいか見詰め直す期間。これからやることはいっぱいあります」

### メ モ

県立大の海外ビジネス研修 国際経営学科3年次の必修科目として3週間以

上、海外展開する日本企業などでインターンシップをする。2018年度はシンガポール、タイ、ベトナム(ハノイ、ホーチミン、ダナン)の3カ国5都市で計画。英

語能力テストTOEICで730点が条件。1期生59人のうち10月27日時点で28人がクリア。3年進級要件となる600点は全員クリアしている。